校長室だより

松江東高等学校

第６号

令和５年６月７日

○「如己愛人」

愛と平和をテーマにした作文コンクールである永井隆平和賞の募集（雲南市主催）が始まりました。応募要項の趣旨には次のよう書かれています。

永井隆博士は、放射線医学の研究により白血病に侵され、また、原子爆弾により重傷を負いながらも負傷者の救護に尽力しました。その後病床にあっても『長崎の鐘』や『この子を残して』などの名作を著すとともに、「己の如く人を愛せよ」という言葉とともに「平和を」の願いを全世界に訴えつづけられました。「永井隆平和賞」は、永井隆博士の精神を若い世代に伝え、人類普遍のテーマに取り組む機会と出会いの場を提供し、明るい日本の未来づくりに資するものです。

雲南市の高校に赴任したのを契機に入会した三刀屋如己の会。入会記念品としていただいた「如己愛人」のステッカーを、校長室の執務机に貼っています。『聖書』にある「己のごとく人を愛せよ」という言葉に従って生きようとした博士は、松江市に生まれ、幼少期を雲南市三刀屋町で過ごされました。博士の功績は、島根県人だからでなく、平和を希求する一人の人間として知っておくべきことだと思っています。

博士は「どん底に大地あり」という言葉も残されました。NHK の朝ドラ「エール」では、如己堂で静養する博士を主人公(古関裕而がモデル)が見舞った時にもらった言葉として放映されました。私たちがコロナ禍のはじまりで観たドラマでした。どん底にも自分の足で立つことのできる地面がある。どん底から見える光を探すことがプラス思考。どん底の状況から幸福は生み出され、育て上げられていく。そんな意味だと理解しています。被爆直後の長崎の人々は、爆風に耐えた一本柱の鳥居に勇気をもらい、復興に尽力しました。東日本大震災では、約７万本もの松がなぎ倒される中残った陸前高田市の「奇跡の一本松」が、復興に向かう人々の心の支えとなりました。

総体が終わりました。これまでの練習の成果がうまく発揮できなかったこともあったと思います。これからの進路実現や日々の生活でも、うまくいかないことやなかなかできないことに直面することは多々あると思います。その時に、「今できることは何か」という小さくても希望をもち、しっかりと踏ん張って、とにかく一歩踏み出すことを心がけてほしいと思います。それが**「小さな挑戦」**に込めた意味の一つでもあります。また、「如己愛人」、それをふるまいで表現すれば**「小さな気遣い」**。その気持ちがあればいろんな人が助けてくれます。一緒に悲しんでくれます。そして自分が進むべき未来への道しるべとなる**「大きな志」**は何かと問いかけ確かめながら進むことが、自立への道程だと思っています。